

働きたい子育てママが寄り合うカフェ 住民が作り出す復興プログラム

石巻駅前のビルの2階にカフェができた。
手作りランチ、朝焼きパン……
カウンターの中で働くのは
市内で子育て中のママたち。
客席でも、ママたちがくつろぐ。
家、職場、大切な人……
あの時、誰もが何かを失った。
日々の暮らしを取り戻すために、
ささやかでもいい、仕事が欲しい。
でも……

小さな子供がいる。
年老いた親がいる。
狭い仮設住宅の中で、
2年半たった今も、先が見通せない。
気持ちだけが、じりじり追いつめられる。
そんなママたちのためにカフェはできた。
「子供がいても」働ける場、働く準備をする場。
「あなたはここにいていいよ」と
受け入れてもらえる場。
もちろん子連れ大歓迎。

時には「癒やしデー」と銘打って、
特技を生かしたいママたちが
貸し切りで催しを開く。
カラーセラピー、アロマ入浴剤作り……
「1日店長」の仕事体験。

ある日の午後、カフェに歌声が流れた。
歌っているのは石田浩之さん。
神戸在住のシンガーソングライター。
阪神大震災の記憶を胸に、
毎月ボランティアで通ってくる。

体験から生まれたオリジナル曲や、
復興支援ソング「花は咲く」。
聞き入るうちに、
ママたちの目に、
涙があふれてくる。

重い記憶は、繰り返し甦^{よみが}える。
けれど、おしきや歌を分け合えば、
安らぎや喜びも甦^{よみが}える。
思い切り泣く「涙活」の後は、翔び立つだけ。
カフェの名は「バタフライ」。

リングリングプロジェクトを訪ねて



上: 茫々たる被災地は公園化の計画が
右: ママたちに会合の場を提供



神戸から来た石田浩之さんのライブで盛り上がるママたち



注: NPO法人石巻復興支援ネットワーク
2011年5月、環境教育や子育て支援の活動をして
いた石巻市の主婦グループを母体に結成。関西・東京・
仙台のNPOが連携した「被災者をNPOとつないで支
える合同プロジェクト」(つなプロ)のバックアップを得
て、復興へ向け、地元の市民活動の育成や企業・自治体
などのネットワークづくりをめざす。
被災者のQOL(人間らしい生活の質)向上と、若者・
女性の就労・起業支援を主眼に、これまで、仮設住宅で
のカフェ、子どもの遊び場整備、地元の事業所で実習す
る「人材育成スクール」、メイク・ビジネスセミナー講座な
どの企画を実現してきた。2013年8月、石巻市と協
力して「コミュニティカフェ バタフライ」をオープン。
JKAの補助を受け、子育て中の被災女性のために、雇
用、情報交換、イベントやセミナー開催など交流の場を
提供している。



兼子佳恵さん

「ママ友」パワーで「やっぺす」

石巻復興支援ネットワーク代表 兼子佳恵さん

石巻に生まれ育ち、21歳と17歳の2児の母。「環境と子どもを考える会」の代表として、12年にわたる活動。震災後、被災地を訪れた市民活動家やボランティアと連携し、住民自らが担い手となる復興支援の新たな一歩を踏み出した。

— 女性同士ならでは、ということもありますか？

お母さんたちのおしゃべりは、話がすぐ飛んで、またしばらくたって戻ってきて……(笑)。それも、失ったものを取り戻していく過程。最後に背中をポン、と押せば、多くの人が歩きだせるようになります。

— 震災後わずか2か月でNPO結成。色々な人との縁があったそうですが。

たまたま震災前年の秋「災害に強いまちづくり」をテーマに、講演会を開きました。講師は、阪神大震災での外国人支援を機に、社会的弱者に目を向けた市民活動をしてきた田村太郎さん。震災発生後、その田村さんらが結成した「つなプロ」というNPOの合同プロジェクトチームを石巻に迎えて、避難所の巡回や被災者からの聴き取りに参加したのがきっかけでした。

— 震災前から一緒に活動していた「ママ友」に加えて、ボランティアや行政など、さまざまな立場の人たちとの関係で悩んだことは？

アジェンダって？ インターンシップ？ 普通の主婦ですから、通じない言葉の数々に戸惑ったり。できない事一つ一つに戸惑い、落ち込みました。

— NPOの愛称は「やっぺす」。どんな思いがこもっているのでしょうか？

地元の言葉で「一緒に～しよう」というような意味ですね。与えられた支援を受け取るだけでなく、必要な事は自分たちの力で作らなければ。でも「頑張れ」と、背中をたたくのではなくて「一緒にやっぺす」って。



illustration by Sawa Fujii

— 震災の当日はどうされていたのですか？

自宅は津波で浸水し、長男と2階で夜を過ごしました。消息が知れなかった中2の次男は、後で聞いたところでは、高台の公園に避難して難を逃れたのですが、その時に見聞きしたことは、未だに口にしません。

— 人々が重い体験を心に秘めている中、ママカフェを始め、元気な企画を次々に……。

お母さんたちが働ける場、働くための準備ができる機会が、いま本当に必要です。ストレスが高ければ「子どもさえいなければ……」という気分になりかねません。

— 内勤仕事の提供や、託児付きの講座、メイクやビジネスマナー教室など、女性を元気づけよう、という気持ちが伝わってきます。

実務を学ぶ機会と共に、大事なものは「居場所」だと思います。ありのままを受け入れて、一緒に話を聞いてもらえるような。

機械工業振興——岐阜県工業技術研究所

関の刃物の伝統受け継ぎ モノづくりの担い手育てる



試料表面の粗さを測る「面粗さ測定機」を真剣に覗き込む

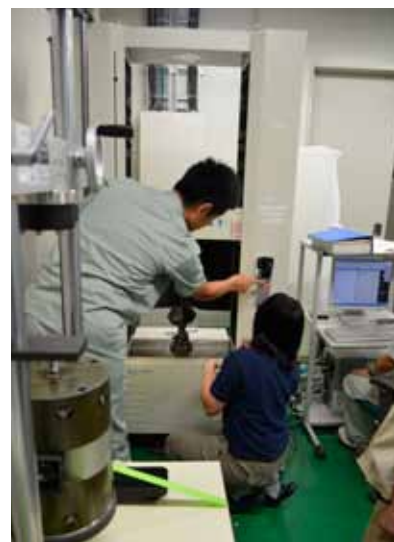
銘刀「関の孫六」で知られる鎌倉時代以来の刀鍛冶の里、岐阜県関市。そこにある岐阜県工業技術研究所は昭和12年、刃物づくりの技術支援からスタートし、現在は金属加工全般、計測技術の開発・支援から、併設のぎふ技術革新センターでのカーボンファイバー強化プラスチック加工技術の研究まで、幅広く活動している。年間の依頼試験は9000件前後、機器開放利用も7000件前後をこなしている。

この工業技術研究所が、県内の中小企業の従業員向けに毎年1回開催しているのが「総合技術者研修 機械・金属課程」。中小企業の技術レベ



「レーザー顕微鏡」を使って包丁の刃先の形状を測定する方法の説明を受ける

ルの底上げを目指し、ある程度の経験をを持った技術者に、より高度な加工技術や計測作業の研修を行う。金属表面の凹凸を測る、試験試料を切り出す、樹脂に金属試料を埋め込み鏡のように磨き上げる、引っ張り・圧縮・曲げ強度を測る、元素を分析する……。若手を中心にした約30人の研修者が、座学18時間と、JKAの補助で導入され



「万能材料試験機」を使い、金属の引っ張り強度などの測定法を職員から学ぶ実習生

た「蛍光X線元素分析装置」や「万能材料試験機」などを使った8時間の実習で技を磨いている。4グループに分かれて行う実習のうち、材料試験では、所員の指導の下、研修者が強度試験にかける試験片の

厚さや幅、断面積を測り「万能材料試験機」に設定して、破断するまで機械的な力をかけ、データを取る。刃物試験と形状観察では「本多式切れ味試験機」を使って積み重ねた紙を切断、包丁の性能を計測する。あるいはレーザー顕微鏡を使って、刃先の形状を観察する。

「企業から派遣されて来ました」という、普段は金属加工に従事している青年は「使ったことのない機器で、やったことのない試験を勉強できるので面白い」と、目を輝かせていた。研修は、仕事時間の終わる午後5時半から2〜3時間ずつ行われ、課程を終えると岐阜県工業技術研究所長から修了証書が交付され、技術者の勲章になる。

リングリングプロジェクトを訪ねて



傷ついた大人の「駆け込み寺」 DV被害者へきめ細かいサポート



運営協力者らとの会議

東京・港区白金の住宅街の路地裏に、家庭内暴力（DV）、セクハラ、パワハラ、リストラなど、理不尽な人間関係に傷ついた大人たちの「駆け込み寺」がある。区の委託を受け、NPO法人「ヒューマンサービスセンター」が運営する「港区コミュニティカフェ」。経験豊富な相談員が無料で悩み事を聞き、疲れた人には息抜きの空間を提供する。

無料でゆったり相談

元公益質屋だった、目立たぬ外見の建物の1階は、カフェ・交流スペース。ワークショップを開いたり、休息を求める利用者が、思い思いに時を過ごす。手織り機、色とりどりの糸、手作りのタペストリーなどが、ゆったりと温かい雰囲気を醸し出す。心の安定を失った人も「織物をして

いると、色で心の整理がいくとよいうです」と語るのは、相談員として20年以上の経験を持つ、事務局長の深澤純子さん。元々は、美術大学の研究室助手として働いていた。カウンセリングは、人の心の見えない有りようを表現するアートに通じるといふ。

2階は、ソファとテーブルを備えた、落ち着いた相談室。1回につき2時間、一般のカウンセリングの約2倍以上の相談時間を確保している。医療機関と違って、住所や氏名を告げなくてもよいし、いわゆる問診票もない。話を「一から」聞かためだ。

暴力逃れ自立へ助走

2012年4月、DV被害者の女性が、子どもと一緒に身を寄せる「ステップハウス」が、カフェの近くにオープンした。オートロック式借り

上げ住宅の個室に、JKAの補助により、低家賃で6カ月滞在できる。暴力を逃れて、新たな暮らし方を探る、自立への助走期間だ。

とはいえ、離婚調停など夫との関係の整理、子どもの通学や社会保障の手続き、就労の準備……数々の作業は、心身が傷ついた女性にとってハードルが高い。「役所に出す書類の書き方も、慣れない人には助けが必要」。センターから歩ける距離にある

ハウスなら、スタッフのきめ細かいサポートが受けられる。区内の志を同じくするNPOと協力して運営している。

リーマンショック以降、目立つのは、職場の圧力で仕事を辞め、心を病んだ女性の相談だという。「ここは人を選別せず、排除しない場所。ゆっくり苦しみや思いを語り、自分を見つめてほしい」と、胸を痛めながらも深澤さんは望む。



アートセラピーなどで製作した手作りの品々が美しい

リングリングプロジェクトを訪ねて



心身のリラックスをはかるため企画された母子の野外キャンプ。力を合わせて切り倒した木に座って、森林インストラクターの話を聞く